

新潟県支部報

1986年11月3日 No.22

私のフィールド

糸魚川

鷲沢澄雄

糸魚川市梶屋敷の小さな谷間、そこは私にとって幸せを呼ぶ所である。市街地から東に約5km、車で10分とかけられない所に私のフィールドはある。土砂の採取とテトラポットを製造する工事現場なのであるが、秋から冬にかけて、私の好きな猛鳥達が多数上空を通過する。年間を通じて17種を確認した年もある。私はいつも工事の邪魔をしないよう気をつけながら現場の片すみを借りてカメラを構える。現場の人々は大変親切であり、親しく声をかけてくれ、心おきなく観察できる。

観察ノートを開くと、この地での数々の胸おどる体験が思い出される。61年3月2日、青空の広がる好天気、期待に胸をふくらませ家を出た。9時30分に現場に着いた時には若いハヤブサの雄が正面の山の上空をせん回していた。そして、どこか北の方で鳩レースが行われたらしく、次々と鳩の小群が南に向かって上空を通過した。ハヤブサはそれらの鳩を、ほとんど片っぱしから襲撃した。一度など、私の頭上で襲撃が行われ、ブーンという羽音とともに、鳩と一瞬すれ違い、ハトの羽毛がひとすじとなって青空に散った。わずかに数ミリの誤差で鳩は生きのび、ハヤブサは獲物を取り逃がした。その後、観察を打ち切



る13時30分まで、襲撃をくり返し続けたハヤブサに、野性のたくましさ、生きることの厳しさを教えられた。また、3月8日には、右手の山から現われたオオワシの若鳥が、私の目の前を低空で横切り、その雄姿を迫力たっぷりに見せてくれた。そして3月15日には同じ位置からオオワシの成鳥が現われたので大いに期待したのであるが、成鳥は私の姿をみるや、Uターンをして、せん回し百メートル程谷の奥を横切ったのである。野に生き残るということは、そうした知恵を持つことであろう。土砂の採取のため、山がけずられ続けているこのフィールドは、近い将来消え去る運命にあり、淋しい限りである。

糸魚川市大字七間175の5
糸魚川中学校

新潟県の鳥類

2. 湖沼・河川

その1 ガン・カモ・ハクチョウ類

本間隆平

新潟県の平野部には、福島潟、鳥屋野潟、佐潟、朝日池などの湖沼があり、また、信濃川、阿賀野川の二大河川のほかに大小多数の河川があります。これらはいずれも、ガン・カモ・ハクチョウ類の渡来地となっているため私たちは、冬のバードウォッチングに大変恵まれた環境の中にいるといえるでしょう。

このように、ガン・カモ・ハクチョウ類の恵まれた越冬地には、1986年1月中旬の調査で、ハクチョウ類3500羽、ガン類3000羽、カモ類35000羽くらいがいることが分っています。今回は、これらについて述べてみます。

(1) ハクチョウ類

ガン・カモ・ハクチョウ類の全国一斉調査は1970年1月から行われ、その時の生息数は750羽でしたがその後しだいに増加し、ここ数年は3500羽くらいが数えられています。この傾向は全国的なもので、1970年に11637羽だったものが、1986年には28101羽となりました。この原因は第一に繁殖状況がよくなったことが考えられますが、越冬地の安全が確保されたことも大きな要因と思われます。

本県の場合、調査が開始された1970年当時ハクチョウ類の渡来地で鳥獣保護区になっていたところは、佐潟と瓢湖の2か所だけでした。佐潟は徳川時代から銃猟が禁止されていたためハクチョウ類の越冬地となっていました。当時、鳥類に関心のあるごく一部の人は知らなかったのに対し、瓢湖は、1950年ハクチョウが渡来してから故吉川重三郎翁の努力により1954年「餌付け」に成功してから一躍有名となり、ハクチョウ保護に大きな役割を演じたことは周知のとおりです。詳細は江村重雄先生の文献を末尾に示しましたので参考にしてください。

こうして全国のハクチョウ渡来地はいずれも地元の人達によって保護され、次つぎと禁猟区となり、本県でも朝日池(1972)、鳥屋野潟(1973)、福島潟(1974)など主な湖沼は鳥獣保護区に設定されました。

日本に渡来するハクチョウ類はどこまで増えて行くのでしょうか。このままいきますとハクチョウだらけとなってしまいうように思われますが、1984年1月から続いた豪雪と低温により、県内の湖沼が長期間にわたって閉ざされたため、300羽近いハクチョウ類が餓死しました。全国でも多数が死亡しましたがこれは生息数と生息環境のバランスが崩れたことを示すものと考えられます。したがって今後増加したとしても、これまでのような急増はないものと思われます。

(2) ガン類

新潟県には、ヒシクイを中心に例年2500羽くらいが渡来して来ます。そのほか200羽くらいのマガン、まれにコクガン、ハクガンが渡来し、カリガネ・ハイロガンなどの渡来報告もあります。

マガンは、佐渡国仲平野に50~80羽が越冬するほか、与板町付近の信濃川に150羽くらいが渡来します。

ヒシクイは1986年1月には福島潟、佐潟、鳥屋野潟を中心に2800羽くらいが観察されましたが、この数は全国7000羽の約40パーセントに当たり、全国で最高の数となっています。

ガン類は1970年まで狩猟鳥に指定され、本県では、マガン137羽、ヒシクイ40羽が撃たれていますが、その年の1月、全国一斉調査の結果、5500羽くらいしか渡来していないことが分り、1971年以降、狩猟鳥から除外されると同時に天然記念物に指定され、保

護施策が講じられた。

ヒシクイはガン・カモ・ハクチョウ類の中では最も警戒心が強く、昼は安全な海上に避難し、夜間、湖沼に集って採餌するため観察される機会は少なく、古くから銃猟が禁止されていた佐潟が凍結し、舟が出られない時だけ昼でも姿が見られる程度でした。

1976年、福島潟が銃猟禁止区域に設定されると1500羽くらいが集まるようになりましたが、当時は人影を見ただけで一斉に舞い上り海上へ出て行ってしまったものです。その警戒心の強いヒシクイもしだいに人を近づけるようになり最近では安心して福島潟で休むようになりました。さらに1984年1月からの豪雪と低温によって鳥屋野潟で止むなく採餌のために近づくようになったのを契機に、警戒心はかつてのヒシクイとは種類が異なるかと思うほど薄れ、瓢湖にも50羽くらいが入るようになりました。今後もこの傾向は強くなり、瓢湖ではハクチョウ類と一緒に、与えられる「餌」に集まるようになるものと思われます。

(3) カモ類

本県には1月中旬、35000～40000羽が生息しています。主なものは、マガモ、カルガモ、ヨガモ、オナガガモとなっていますが、そのほかヒドリガモ、キンクロハジロ、ホンハジロなどもよく見られ、これまで本県では24種類が観察されています。最近の傾向としてオナガガモが急増して来ていますが、オカヨシカモがよく観察されるようになったこともあげられます。

以上、ガン・カモ・ハクチョウ類について簡単に述べてみました。嬉しいことにいずれも渡来数は増加の傾向にあります。一見恵まれたような本県の生息環境に注意してみると、最近急速に悪化していることが分ります。特に湖沼にその傾向が強く、近年では20年ほど前にオオバンが多数生息していたといわれる銚潟（千葉元一 1966）が干拓され、

姿を消しました。県内最大の湖沼、福島潟は半分の170ヘクタールばかりを残すだけとなり、それも干拓のために排水機場を整備して水位を下げたことにより急速に原野化が進み水面は承水路を除けば極く薄かとなってしまいました（写真）。おそらくあと数年で水面はなくなり、原野を好むヒシクイさえも米なくなることでしょう。現在でも僅かな降雪によって雪原となり、ヒシクイは鳥屋野潟や佐潟へ移動してしまいます。その佐潟も、用水池としての価値がなくなり、管理されなくなったため急速に原野化が進み（本間 1980）、また、県内最大の開水面を持つ鳥屋野潟は水質浄化の目途がたっておりません。

河川に目を向けますと、県内最大の渡来地である与板町、中之島町及び分水町一帯の信濃川は狐野としても全国的に有名なところであり、狩猟期間には鳥屋（とや）が立ち並ぶためほとんどカモ類を見ることができません（渡辺 央 1980）。そのほか阿賀野川河口もカモ類が多数集まりますが、同様に狩猟期間には、極く少数が見られるに過ぎません。

昭和46年以降講じられた保護施策によって癒えたカン・カモ・ハクチョウ類の生息地はこのように悪化しつつあります。私たち野鳥の会は、今何をしなければならぬか、よく考える時期に来ていると思います。

※ 文献は次号に掲載します。



新潟市上所一目12のB-532

新潟県環境保健部環境保全課副参事

平ヶ岳山頂一帯にみられる鳥類

石部 久

平ヶ岳は不思議な山である。限りないあこがれと美しさを感じさせる山である。山頂一帯はなだらかな。あたかも平原を想わせるように平らである。平ヶ岳をとりまく山々は、尾瀬の焼ヶ岳(2,346m)、巻機山(1,960m)越後三山の八海山(1,720m)中ノ岳(2,085m)駒ヶ岳(2,003m)などがあり、遠く鳥海山、浅間山、北アルプス、南アルプスの峰々、富士山などが展望できる。Symphony of Earthと呼ばれる秘めた歴史を想わせ、訪れた永河の時代に水、氷などの限りない侵食を受け、谷はV字形に削られ、おりなす山容を削った。3億年の太古、古生代に海底で堆積しながら沈降を続けていた地層に突然、異変が生じたであろう。花崗岩が液状に貫入し、変質を与え、今まで沈降し続けた地層が上昇運動に変わった。海から陸、そして山となり、躍動する地球の大地の詩が、山頂にたつとみえるのである。

学術的にも無限の価値を秘めた平ヶ岳の自然を四季を通して記録しようと、北魚沼地区理科教育センター、平ヶ岳自然総合調査グループに参加し、生息する鳥類の分布状況を調べた。また平ヶ岳には毎年、鳥の繁殖期に2度ほど登り調査を続けている。学術調査報告として総合調査の結果を1980年「知られざる山、平ヶ岳」として北魚沼地区理科教育センターから出版した。また「平ヶ岳の鳥類」として野鳥新潟第53号に鳥相の概要を報告している。今回は、そのなだらかな山頂一帯に生息する鳥類について報告したい。

☒ 山頂一帯の植生と地形

平ヶ岳は標高2,140mで越後三山只見国定公園の南端、北緯37度、東経139度10分に

位置し、それを含む稜線は、只見川水系と利根川水系の分水嶺をなしている。平ヶ岳の植物をみると、中部山岳における植物垂直分布から山頂部一帯は亜高山帯に含まれる。しかし、2,000mを越えるあたりからは高山帯植物が分布している。このことは、緯度、冬期季節風多雪などの原因からと考えられている。

日本海側山地では冬期の多雪と季節風のため、オオシラビソ林としてみられるのは少ないが、発達している越後山系の山として、平標山、巻機山、平ヶ岳で、このオオシラビソがみられ、特に平ヶ岳は最も広い面積をしめているのが特徴としてあげられる。オオシラビソは1,600m付近から出現してくるが、樹高20mに達する樹林は1,700m付近からである。標高が上がり、立地条件等で樹高、樹形に変化がみられる。山頂部一帯では、オオシラビソが風衝地のため矮生化し2mから5mほどになっている。したがって山腹斜面と山頂部風衝地では、環境構造は同じオオシラビソ主体でもまったく異なり、鳥類生息にも大きな影響をだしている。山頂部の植物群落組成は標高の高いところから、ヌマガヤ、イワイチョウなどの草がおおい、ハイマツが島状に点在する。次にオオシラビソ矮生化林、ハクサンシャクナゲ、ミネカエデ、チシマザサ、オオシラビソ林、ダケカンバがつづき、山頂部平ヶ岳沢は、一面のチシマザサにおおわれている。

☒ 山頂部に生息する鳥類

<イヌワシ>

イヌワシは平ヶ岳山頂の東斜面に出現する。一日に必ず数回みられるが、ほとんど探索飛行の形をとり、斜面をまくように飛んでいる。

平ヶ岳は新潟県側にあたる北西斜面が緩斜面になっており、群馬県側の東斜面が急斜面になっている非対称山稜の山容をもつ。緩斜面の北西側はオオシラビンが森林を形成しているが、その上空をイヌワシが飛行するところを、いまだみていない。出現記録すべてが東斜面の岩場上空である。姫ノ岳見晴台の花崗岩ガレ場から観察していると、下方谷間から上昇する気流に乗って舞い上がってくる。帆翔しながら高度をあげ、尾根上空に達すると、探索を始め、尾瀬・景鶴山方面へ飛去するか、大倉山方面へ下降するように飛行する。また羽毛にわりあい白斑の小さなメスの個体は、山頂部方向から、山稜尾根境を探索飛行し、会津駒ヶ岳方面へ飛去する。1984年8月13日にこの個体が、ウサギらしきものを足につかみ白沢山方面から飛来し、東斜面の大岩の上におり、食うのをみている。平ヶ岳では3羽のイヌワシが同時に飛んでいるのを1984年8月14日にみたが、1羽は黒褐色の羽色をしており、他2羽の茶褐色に比して著しく異なることから幼鳥と判断した。平ヶ岳において繁殖営巣地は発見していないが、山頂部東斜面のいずれかにあるものと思われる。

＜カヤクグリ＞
 藪の中にひそみ、なかなか姿をみせない鳥だが、山頂部の鳥状に群生するハイマツ帯に生息する。1984年8月14日も姫ノ岳からたまご石まで7個体のオスを観察した。他に2個体のエサをくわえているものもみている。オスのさえずりは、8月25日頃まで終わる。カヤクグリは、ハイマツ林に接するササや、ドウダンなどの茂る場所にもエサをとり出現しているが、生活の中心はハイマツ林である。

＜ルリビタキ＞

おり、下部が平ヶ岳沢である。沢から山頂にかけてはオオシラビンを主体としてダケカンバが少しまじり混交林となっている。そこにルリビタキが生息している。山頂部のセンサスでは、4個体のオスを観察した。平ヶ岳の標高が低いダケカンバを主体とした混交林では生息個体数は多い。



＜コマドリ＞
 平ヶ岳では標高1,500mからコマドリが出現する。北西斜面は特に亜高山針葉樹オオシラビンが高木樹林を形成しているため、その林床にコマドリが多く生息する。比して東斜面は、オオシラビンが発達していないことから個体数は少ない。山頂部にはコマドリの生息は2個体を数えたただけだが、オオシラビン純林と結びついている。

平ヶ岳山頂付近(1,950m~2,139.5m)の鳥類 (1983年7月 1984年8月)

平ヶ岳山頂付近(1,950m~2,139.5m)の鳥類 (1983年7月 1984年8月)		
ワンタカ科	イヌワシ	
アマツバメ科	ハリオアマツバメ	アマツバメ
ツバメ科	イヌツバメ	
セキレイ科	ビンズイ	
イワヒバリ科	カヤクグリ	
ヒタキ科	コマドリ	ルリビタキ
	ウグイス	メボソムシクイ
アトリ科	ウソ	
カラス科	ホンガラス	ハシブトガラス

新潟市五十嵐三の町9753の26
 上越教育大学大学院動物生態学研究室

信濃川と野鳥

野鳥の休息地、繁殖地、越冬地として重要な長岡市域の環境

長岡野鳥の会副会長 沢田和夫

1 はじめに

3月になり大空からヒバリの声が降るように聞こえてくると、"あゝ待ちに待った春が来たな"と実感する。雪国長岡ではヒバリは春告鳥とも言える。4月上旬になると信濃川河畔の雪も消え枯草の下から新緑の芽が伸びてくる。この頃になると、カシラダカ、ホオアカが土手の草むらに群がって囀ずる。

このようにして、河畔はいっきに賑やかになる。

2 渡り鳥の休息地として

長岡市の信濃川河畔は広大な面積で、草地、荒地、ヨシ原、ヤナギ林、湿地、中州、畑地、水田、開水面、果樹園などと多様な環境に恵まれ、渡り鳥の休息地として多くの野鳥が飛来する。春はカシラダカ、ホオジロなどが目につく。

3 繁殖地として

信濃川河畔で繁殖する野鳥の数は多い。中でもヤナギ林ではサギ類（ゴイサギ、コサギ、アオサギ、など）が二千羽以上コロニーを作って繁殖している。また草地、ヨシ原ではオオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、カッコウが繁殖している。さらに中州ではコアジサシが数百羽コロニーを作って繁殖する。

その他ムクドリ、セキレイ、カルガモ、カワセミなど多くの鳥が繁殖する。

4 越冬地として

冬になるとカモ類が北の国からやって来るコガモ、カワアイサ、ホオジロガモをはじめいろいろのカモ類が中州に羽を休める。またハクチョウ、数種のカモも優雅な姿を見せて、雪の信濃川を飾る。

さらにオシロワが、毎年長生橋附近の中州に現われ、雄々しい姿を見せる。オオワシが現われる年もある。ところが11月15日 狩

猟解禁になり、ハンターが河畔に来ると、カモは一斉にどこかへ行ってしまふ。2月中旬に狩猟期間が終ると再び何百羽もの水鳥が集合して北へ渡る準備をする。

5 貴重な自然環境を大切にしよう

信濃川中流域の長岡市河畔にこのように多くの野鳥が集うのには、いくつかの理由がある。

その1 本邦最長（流程367km）の河川で、長岡市域は中流域から下流域への移行帯とみなされ、河幅も広く（約1.2km）水流はゆるやかで砂礫の中州もいくつか出現している。

その2 多様な自然環境を有し河川敷が発達し、それぞれの立地条件によって、ヤナギ、ニセアカシヤ、オニグルミなどの樹木も場所によって粗あるいは密に分布している。また畑や水田などの耕地や牧草地、果樹園なども含んでいる。

その3 冬期は積雪が多く、河川敷が広いので人家から遠く、人が野鳥の集まる所へ近づきにくい。しかし一般猟野になっているので、狩猟解禁期間中は水鳥は姿を消してしまう。

近年河川の自然環境が見直され、開発と自然保護の調和が各方面から重視されるようになってきた。長岡市域の信濃川河川敷も今こそ、自然保護と開発の調和をはかり、サンクチュアリーとして、後世に残したいものである。

【文献】

渡辺 央（1983）信濃川の鳥類

渡辺 央（1985）長岡市信濃川河畔における鳥類の分布とその季節的变化

長岡市立科学博物館研究報告

輝き始めた昆虫達

— バッタ・コオロギ・ギリギリス —
 新潟青陵女子短期大学助教授
 長 島 義 介

日本の昆虫学は主として標本にして見応えのある昆虫とか、農業や医学に直接関係した害虫を対象にして発展してきたためか、アメリカやヨーロッパに比べて昆虫の研究分野に偏りが見られる。中でもコオロギやギリギリス、バッタ等、いわゆる直翅類と呼ばれる昆虫の研究はかなり遅れており、図鑑などでは雑昆虫といった取り扱いを受けている。

このことは、古くから虫の音を愛し、世界中で一番虫の鳴く声に敏感とされる日本人の研究者たちが、何故深く探求してこなかったのか不可解である。しかし、近年若い研究家集団（日本直翅類研究グループ）によって意欲的な調査研究が行われ、分類学的、生態学的に興味ある新知見が続々と報告され、直翅類はこれまでにない脚光をあびはじめている。

筆者は十数年前に県内の直翅類調査を開始したが、調査が進むに従いその形態や生態に興味を感じるようになり、現在では華麗な昆虫に勝るとも劣らぬ魅力を感じている。それは鳴く種類が多いことにもよるが、美しい鳴き声は無論のこと、「虫はなぜ鳴く」の命題は、物理学的、神経生理学的手法を用いた現代科学的な研究テーマに誘ってくれるからでもある。また翅が退化し移動性が弱く、多種類に分化しているグループの存在、永河時代の残存種とみなされる高山性の翅の退化したフキバッタ類の存在は、進化における隔離機構や日本の昆虫相の成立過程を解く研究材料として魅力的である。

新潟県には現在約90種の直翅類が知られているが、100種を越すのは時間の問題である。県内産の直翅類の特徴は、日本海側における分布の北限とみなされる種類が多いこと

である。また中にはオオクサキリのように、現時点では日本海側で唯一の生息地とされる種類もある。県境の山岳地帯には、日本固有のクチキウマ属の仲間が生息している。クチキウマ類は翅がなく、コオロギとカマドウマの中間といった感じのする昆虫で、採集個体数が少ないので、未だその正体は不明な点が多い魅力的なグループである。

筆者が現在取り組んでいる直翅類の研究の一つに、県内産フキバッタ類の分布調査がある。フキバッタはイナゴ科に属し、翅が小さいので飛べないバッタである。従来わが国では4～5種類にしか区別されていなかったが、最近では10種以上の記載が見られ、それらは地理的に偏った分布をしていることが明らかになってきた。県内の調査は未だ少なく、その分布種すら定かでない。しかし低山帯には最優占種であるミカドフキバッタの他に2種、亜高山帯以上にはアオフキバッタの他に2種の生息が認められる。これらの中には翅が退化した種類もあり、種の検討はこれからと言ったところである。

フキバッタに限らず直翅類の仲間は、現在再分類期にあり、これからの成果が期待される昆虫たちなのである。



ミカドフキバッタの産卵（弥彦山頂）

小千谷市信濃川国鉄山本山発電所調整池に おける非潜水ガモ・潜水ガモの飛来状況

中山 正 則

1 はじめに

小千谷市信濃川国鉄発電所調整池は、昭和47年11月より新潟県の鳥獣保護区に指定され、冬鳥として飛来するカモ類の安定した越冬地となっている。昭和60年8月より現在の調整池の上方に第二発電所用の調整池が建設中である。私は、工事及び調整池の完成が、現在の調整池のカモ類にどのような影響を及ぼすか知りたいため、調査を行っている。

今回は、この調査結果から非潜水ガモと潜水ガモの飛来状況を区分し、整理してみた。

2 調査地及び調査方法

調査地の調整池は、小千谷市山本にあり、信濃川の河岸段丘を発電所用に改削し作られた人造湖である。水深は、水の利用状況から一定していないが、最深時でおよそ2～3 m程度である。中央部に小規模のヨシ原がみられるほかは水面と堰堤となっており、水底部は泥状となっている。

調査は、調整池水面とヨシ原及び堰堤部分に限り、ここに出現するカモ類の個体数を記録した。調査結果が一定性をもつように、月の初旬・中旬・下旬の3回を目途として行った。調査期間は1984年10月～1986年9月の2ヶ年間である。10月から調査を開始したのは、カモ類の渡来期に合せたものである。

3 調査結果

1) 非潜水ガモと潜水ガモの観察個体数と平均個体数

84年10月～86年10月の調査期間内に確認された総個体数は、100,039個体であった。このうち、オンドリ・マガモ・カルガモ・コガモ・トモエガモ・ヨシガモ・オカヨシガモ・ヒドリガモ・オナガガモ・シマアジ・ハンビロガモの11種が非潜水ガモとして確認され、95,715個体が記録された。一方、潜水ガモはホシハ

ジロ・キンクロハジロ・スズガモ・ホオジロガモ・ミコアイサ・カワアイサの6種類で、確認総個体数は4,326個体であった(表1)。

調査期間内に75回調査を実施したが、調査回数当りの平均個体数は、全体で1,333.8個体であり、そのうち非潜水ガモは1,276.2個体で、潜水ガモは57.7個体であった。平均個体数の最も多い月は、85年12月(4,818.0個体)であり、次いで86年1月(3,991.5個体)、

84年12月(3,633.0個体)、85年1月(3,421個体)、84年11月(3,045.3個体)、85年10月(2,960.3個体)の順であった。非潜水ガモでは、85年12月(4,749.7個体)、86年1月(3,942.5個体)、84年12月(3,519.2個体)の順であり、潜水ガモでは85年2月(132.5個体)、85年11月(129.3個体)、85年3月(127.0個体)の順であった。これからも知られるように、非潜水ガモでは多積雪期に増加する傾向がみられ、潜水ガモでは多積雪期では減少する傾向がみられた(表1)。

2) 年別非潜水ガモ・潜水ガモの出現率と平均個体数

① 出現率

非潜水ガモの調査回数に対する出現率は、84年10月～85年9月では94.4%で、種類別にみるとカルガモ(94.4%)、コガモ(83.3%)、マガモ(63.9%)の順であり、85年10月～86年9月では100.0%で、種類別ではカルガモ(100.0%)、コガモ(84.6%)、マガモ(74.4%)の順で前年と類似した傾向がみられた。結果から知られるようにカルガモの出現率が極めて高かった。

一方、潜水ガモの場合は、84年10月～85年9月では80.6%で、種類別にみるとキンクロハジロ(80.6%)、ホシハジロ(58.3%)、ミコアイサ(27.8%)の順であり、85年10月～86年9月では79.5%で、種類別ではキンクロハジロ(79.5%)、ホシハジロ(69.2%)

ミコアイサ(30.8%)の順で、やはり前年期と類似した傾向がみられた(表2)。

② 平均個体数

非潜水ガモの観察1回当りの平均個体数は、84年10月～85年9月では1,304.1個体で、種類別ではマガモ(652.0個体)、カルガモ(451.3個体)、コガモ(389.2個体)の順であり、85年10月～86年9月では1,317.2個体で、種類別ではコガモ(617.0個体)、マガモ(466.2個体)、カルガモ(362.7個体)の順であった。結果から知られるように種別の平均個体数の異動はみられたが、年別平均個体数は一定していた。

潜水ガモの場合は、84年10月～85年9月では61.9個体で、種類別にみるとキンクロハジロ(48.4個体)、ホシハジロ(36.0個体)、ホオジロカモ(7.1個体)の順であり、85年10月～86年9月では53.8個体で、種類別ではキンクロハジロ(37.6個体)、ホシハジロ(31.1個体)、ミコアイサ(4.0個体)の順であった。

3) 非潜水ガモ 潜水ガモ月別の比率

非潜水ガモと潜水ガモの比率(百分率)を84年10月～85年9月と85年10月～86年10月別にしたのは、表2のとおりであるがこれを更に図1のとおり月別に区分してみた。

潜水ガモの6種はいずれも冬鳥であるので、6～8月の間は8月下旬を除くと全く見られなく、非潜水ガモの比率は、99.9～100.0%となった。9月頃からキンクロハジロ・ホシハジロが増えはじめるので、潜水ガモの9月～11月の比率は、2.1～4.5%となり、12月～1月の多積雪は非潜水ガモの個体数が増え、逆にキンクロハジロ・ホシハジロの個体数が減ったため、1.2～3.1%となった。2月は2.8～5.3%と再び潜水ガモの比率が増え始め、2月下旬～3月頃より大挙して渡去が始まる。非潜水ガモの個体数が減少する一方、キンクロハジロの個体数が増加し渡去期が遅いのも相まって、3～5月の潜水ガモの比率は16.0～35.5%の高比率となった(表1・図1)

4 まとめ及び考察

私は、1976年から調査地のカモ類等を観察

してきたが、潜水ガモのキンクロハジロ・ホシハジロの渡来数が近年増えてきたことに対し興味を覚え、今日の調査データをもとに非潜水ガモと潜水ガモに区分し、分析を行った。

調査結果のとおり、非潜水ガモは、96%程を示め、潜水ガモは4%程にとどまった。潜水ガモの中でもマガモ・カルガモ・コガモの優占3種で全体の90%を越え、高比率を示した。

ホシハジロ・キンクロハジロの2種で、潜水ガモの98%近くを占め、スズガモ・ホオジロカモ・ミコアイサ・カワアイサは合せても2%弱であった。特にスズガモ(2例)・ホオジロカモ(1例)は少なかった。これは、スズガモの場合は非内陸性のカモ類であり、カワアイサは主に河川選好型のカモ類であるためであろうと考えられる。事実カワアイサは調査の近くにある信濃川では多数観察される。

非潜水ガモの11種とも信濃川で観察されるが、特にマガモ・カルガモがここでも優占種となっている。これら個体の中には、調査地と信濃川を交互に利用しているものも多いものと考えられる。多積雪期に非潜水ガモが増えるのは、狩猟期とも一致し、信濃川から入ってくる個体が増えるためであろうと考えている。

潜水ガモのホシハジロ・キンクロハジロが多積雪期に減少したことは何によるものかよくわからない。この時期、信濃川でキンクロハジロが観察されるので、採餌が何かの関係で移動したとも考えられるが、ホシハジロは極めて少く、単に採餌だけによるものとは考えにくい。2月～3月になって再び個体数が増えたキンクロハジロが5月まで逗留するため、3～5月の潜水ガモの比率が高くなることは調査結果が示すところであるが、調査地には常に水路を辿って信濃川の流入があり、これに伴って魚類が入り込むため、採餌が安定することにより残留するものであろう。

カルガモが6月の一時期を除くと常に観察されるのは、留鳥のものと冬鳥のものの両方が観察される結果であろう。

5 要約

1) 1984年10月 ~ 86年9月の間、小千谷市信濃川国鉄発電所でカモ類の調査を行い非潜水ガモと潜水ガモの飛来状況を区分し整理した。

2) 確認された総個体数は、100,039個体であり、非潜水ガモはオンドリ・マガモ・カルガモ・コカモ・トモエガモ・ヨシガモ・オカヨシガモ・ヒドリガモ・オナガガモ・シアマジ・ハシビロガモの11種類95,715

個体であった。潜水ガモは、ホシハジロ・キンクロハジロ・ススカモ・ホオジロガモ・ミコアイサ・カワアイサの6種類4,324個体であった。

3) 非潜水ガモは、多雪期に増加する傾向がみられ、逆に潜水ガモはやや減少する傾向がみられた。

小千谷市船岡町1128
小千谷市役所

表1 潜水ガモ・非潜水ガモ別観察個体数と調査回数当りの平均個体数

区分	月別												計													
	84/10	11	12	85/1	2	3	4	5	6	7	8	9														
調査回数	A	4	3	2	4	2	3	5	4	2	2	3	3	3	2	4	5	5	4	2	2	3	3	75		
非潜水ガモ観察個体数	B	5777	6789	1037	1742	4671	1468	564	252	10	221	345	1614	8677	7207	11871	2885	7659	1787	2056	474	4	3	737	68775715	
潜水ガモ観察個体数	C	284	389	227	273	265	381	310	56	-	-	-	41	242	312	205	98	216	494	455	77	-	-	1	15	4324
カモ類観察個体数(B+C)		6261	7178	1264	2015	7336	691	874	308	10	221	345	1655	8919	7519	12072	2983	7875	1981	2511	551	4	3	738	73199039	
調査回数当りの平均個体数		1444	2431	518	433	1421	227	173	75	5	110	173	883	436	312	205	98	194	392	402	193	2	1	250	927	

表2 年別期の非潜水ガモ・潜水ガモの出現率・平均個体数・百分率

区分	種名	調査回数												計												
		84/10	11	12	85/1	2	3	4	5	6	7	8	9													
非潜水ガモ	1.オンドリ (Anas platyrhynchos)	36	37	1	1	4	1	287	267	40	10	0.61	0.00													
	2.マガモ (Anas platyrhynchos)	•	•	23	27	14,797	13,985	637	744	6,320	4,662	32.01	26.15													
	3.カルガモ (Anas platyrhynchos)	•	•	34	37	15,344	14,146	944	1,000	4,513	3,627	32.73	26.46													
	4.コカモ (Anas crecca)	•	•	30	33	11,677	20,977	833	846	3,872	6,170	25.08	27.23													
	5.トモエガモ (Anas formosa)	•	•	4	4	83	8	11.1	103	208	2.0	0.19	0.01													
	6.ヨシガモ (Anas formosa)	•	•	2	2	3	3	5.6	5.1	1.5	1.5	0.01	0.01													
	7.オカヨシガモ (Anas strepera)	•	•	-	3	-	9	-	7.7	-	3.0	-	0.02													
	8.ヒドリガモ (Anas penelope)	•	•	11	18	75	82	30.6	44.2	68	4.6	0.16	0.15													
	9.オナガガモ (Anas acuta)	•	•	20	29	1,678	1,568	55.6	74.4	81.9	54.1	35.2	2.93													
	10.シアマジ (Anas versicolor)	•	•	-	1	-	1	-	1.9	-	1.0	-	0.00													
	11.ハシビロガモ (Anas sylvatica)	•	•	20	17	520	594	55.6	43.6	26.0	34.9	1.12	1.11													
潜水ガモ	6種類	36	37	34	37	4434	51,374	944	1,000	1,304	1,372	75.22	76.08													
17種類		36	37	34	37	46,568	53,471	944	1,000	1,364	1,376	100.00	100.00													

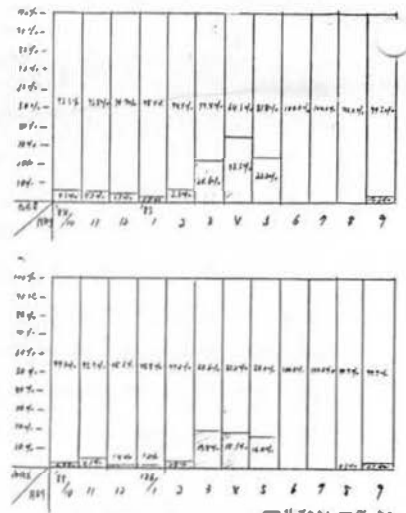


図1 非潜水ガモ・潜水ガモの月別の割合 (百分率)

秋の研修会

恒例となった秋の研修会が、今年も9月6日と7日に中村登流先生を講師にお迎えして越前浜の茶屋で行われた。

まず中村先生は「鳥の生活の3角形」という演題で、1年間の鳥の生活を3期（冬期、繁殖期、繁殖終期）に分けて、各時期における鳥社会の状態を講演された。20年に及ぶエナガの研究を通して、我が国の鳥社会の研究に先鞭をつけられた先生の話は、2時間という時間が短く感じられた。

さて、講演に続いて会員のすばらしいスライドが供覧された。今回も北海道の鳥や、珍しいヨシガモ（♂）とマガモ（♀）の交尾行動など貴重なスライドが次々に紹介されて楽しかった。ただ今回に限らないが、このようなスライド紹介の時には、撮影者が1枚、1枚その鳥や情景についてしっかりと紹介してもらいたいものである。見ている人達の中にはその鳥の名前すらわからないまま次々にスライドが変ってしまふようなこともあって残念に思った。夜も深まったが研修はまだまだ続いた。久々に会った鳥友、初めて参加した人達などが集まって懇親会を開く。鳥の話、今後の会のことなど……酒も手伝って話は大きくなり、最後は日本一の支部になるようなところで話が終ったように思う。

7日の探鳥会は快晴であった。朝食後、四ツ郷屋浜に集合すると当日参加の人達も合流



して総勢70名位になっただろうか。トウネンの群が汀を飛び、砂浜にできた水溜りを中心にシギ・チドリが集まっている。トウネンの他にメダイチドリが目立つ。中形のソリハシギやキアシシギ、さらに大形のオオソリハシギや夏羽のダイゼンも観察された。そして、トウネンに混じってほぼ同大のヒメウズラシギが観察され、本県の初記録種になった。昼近くまでゆっくりと観察を続け、13種ほどのシギ・チドリ類を確認することができた。この探鳥会が終り、シギが去ると、もう冬鳥のカモ類が渡来してくる。

（文責 渡辺 央）

